

# ◆連載

# いま留萌むかし 第三十話

## ●留萌の星カブト

士の家々に代々伝わっていくものである。特に兜を着用できるのはある程度の武将階級の者だけである。ある程度名のある武将が留萌にやってきたといえよう。

現在一番可能性のあるのは室町時代に東北地方で戦乱があり、その時敗れた武将が船に乗り、留萌の地にたどりついたというのが真相ではないだろうか。

まだアイヌの人たちの静かな地であったルルモツペ（留萌）に戦いに敗れた武士の団が上陸した。東北の戦乱で敗れた落武者たちである。その中の大將らしき人物は黒漆塗りの巖星の兜を頭に戴き、じっと自分たちの故郷の方角をみつめていた。彼に従うものは少しの側近ばかり、それも多くは手負いである。やつとの思いで乗ってきた小船を岸に上げ、打ち上げられていた小枝を拾い焚火を囲んだ。遠くでは蝦夷狼の遠吠えが聞こえ、ただ、打ち寄せる波の音だけが響いた。だれ一人声を発するものはいない。思うのは故国のことばかり、呆然と焚火の灯をみつめていた。

このような場面が実際に留萌の塩見町の海岸で起こった可能性がある。明治三十一年ごろ塩見町から和泉さんという人により兜が発掘された。昭和八年子息の方が旧制留萌

中学校に寄贈され、その後新制留萌高校に現在まで保存されてきていた。この貴重な資料は昭和二十年発行の留萌町史の中に紹介されている。そこで、留萌高校に問い合わせたところ、三十八年ぶりに幻の兜が姿を現したのである。

十二間の星兜で大きな空星が鋸になつており、黒漆が表面に塗られていた痕跡がある。当時は巖星（いがぼし）の兜とよばれいかめしい勇壮な雰囲気をかもしだしていたことであろう。

また、これと一緒に出土したものに杏葉（ぎょうよう）というものがある。胴丸鎧（どうまるよろい）の肩からつり下げるものであるが、これは鎌倉時代の後期以降に盛んに用いられるようになるものであるが、この形も珍しい。現存するものは鹿児島県に一件残っているだけである。時代的にはやはり鎌倉時代のものであろう。

その後、兜を詳しく調査したところ、思わぬ貴重な兜であることがわかったのである。まず、この兜の作られた時代であるが平安時代末期つまり、源氏と平家が戦っていた時代にあたるのである。この時代の甲冑や兜が現存するものは数が少なく、残っているものはほとんどが国宝や重要な文化財として指定されているものがほとんどである。この兜も古代の甲冑を知る上で非常に貴重な資料なのである。

出土した兜は鉢の部分だけでシコロヤや吹き返し、眉庇（まびさし）などの付属品は朽ち果てたものか現存しない。

それではいつだれがこの兜と共にルルモツペの地に来たのであろうか。兜は平安時代の末期の作。杏葉は鎌倉時代のものということになる、鎌倉時代以降のこととおもわれる。兜というものは元来武

士

士

士



星カブト